



ゾルゲ関係書の出版

ミハイル・アレクセーエフ

『あなたのラムゼイ』（2010年）上海編

『あなたに忠実なラムゼイ 1933-41年』 上下、東京編（2017）

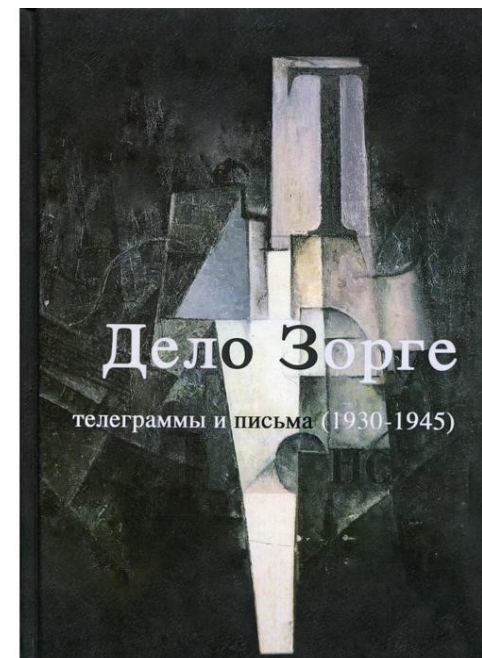
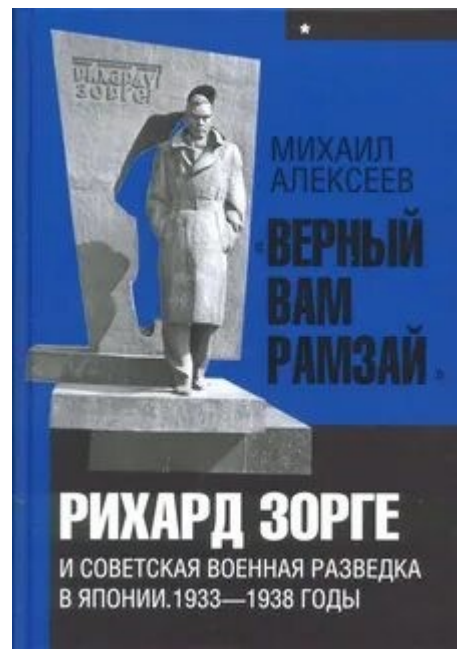
アンドレイ・フェシュン

『ゾルゲ事件資料集』（1930－45年）

電報、手紙、モスクワの指示など

650本の文書を公開

GRU公文書館、国防省中央公文書館



「1941年のゾルゲ」

- 1930－32年 上海勤務
- 1933年 9 月 東京着任
- 1941年 3 月 日米交渉
- 4 月 日ソ中立条約
- 6 月 独ソ開戦
- 7 月 御前会議、南進決定、関特演
- 9 月 対米開戦国策要綱
- 10月 ゾルゲ機関摘発、東条内閣発足



ゾルゲの会計報告

- ゾルゲ機関（クラウゼン、ブケリッチ、宮城、尾崎）
- 40年11月の支出は4180円。
- 尾崎（200円）、宮城（420円）、川合（90円）
- 都内3カ所に隠れ家、旅費、フィルム代、
- モスクワは41年1月、情報の質が低いとして2000円に削減
- ゾルゲは「月3200円が必要」と反発
- 円と米ドルでソ連大使館武官室が提供
- ゾルゲは早期帰国、非常時の貯え、休暇取得を要求

ドイツ軍侵攻警報（ゾルゲ→モスクワ）

- 「東部国境に80個師団」（40年12月28日）
- 「独軍将校団に反ソ機運」（41年3月10日）
- 「開戦はいつでも可能」（4月11日）
- 「ソ連は穀物と資源の拠点」（5月2日）
- 「独軍は150師団を配備」（5月19日）
- 「独ソ戦は6月15日開戦」（6月1日）
- 「ソ連軍はポーランドより弱い」（6月20日）
- 「ゾルゲに1000ドル渡せ」（6月23日、モスクワ→武官室）

クラウゼンのサボタージュ

- 「ショルは、ドイツ軍が左翼から猛攻を加えれば、ソ連軍に最も強烈な一撃を加えることができると語った」（6月1日、ゾルゲの電報）
- 「左翼の意味は何か説明せよ」（6月3日、モスクワ）
- 「最初の主力による攻撃が、ドイツ軍の左翼から赤軍に対して加えられるということだ」（7月3日、ゾルゲ）
- 「第四本部の幹部たちには、『左翼』の意味がわからなかった。ゾルゲに不満を持つクラウゼンが短縮した」（ワイマント）

南進情報で「両論併記」

- 「7月2日の御前会議で、仏印進駐決定。5週間以内にウラジオストク攻撃も」（7月3日）
- 「赤軍敗北に備え、対ソ軍事行動準備」（7月10日）
- 「オット大使が日本に対ソ参戦促す」（7月10日）
- 「日本軍が大動員、110師団が満州移動」（7月22日）
- 「尾崎によれば、日本で90万人を動員」（8月11日）
- 「アムール川支流、ウラジオ攻略も」（8月11日）
- 「日本軍の対ソ参戦の可能性消える」（9月11日）
- 「日本は今年、ソ連に参戦しない」（10月3日）

GRUから在京情報部（グシェンコ武官） へ指示（7月24日）

▽日ソ断交時の対応

在京のイリーガル工作員（イスバリン、イバ、イーラ、マロン、イリアダ）で機関を組織。イリアダかイーラがトップに。

アレクセーエフによれば、イリアダは在日独大使館で働く女性。ウクライナ西部リヴォフでスパイにスカウトされ、日本の上流階層に溶け込む。

非合法工作員「カルメン」（26歳ユダヤ系米女性）も暗躍。

N K V D（内務人民委員部）もイリーガルを運用。「エコノミスト」（天羽外務次官？）

ゾルゲの身元に疑惑（8月11日付文書）

- ゾルゲは長期にわたり、人民の敵の指導の下で働く（ベルジン本部長、ウリツキー本部長、シロトキン日本課長）
- ゾルゲは在京独大使館のファシスト細胞の書記
- ゾルゲは日独がソ連に差し向けた二重スパイの可能性
- 自尊心が強く、自己を過大評価
- ゾルゲ機関以外に組織を持たないため、働かせ続けることが望ましい

ゾルゲ逮捕後の在京軍情報部（ミハイ ル・イワノフ）の報告

- 当地で得られた情報によると、5日前にゾルゲとヴケリッチが逮捕された（10月30日）
- ゾルゲは11月11日に拘置所でピストル自殺した。（11月13日）
- ドイツ大使館の情報によると、ゾルゲやクラウゼンはソ連のスパイ行為を働いたとして終身刑を言い渡された。（42年3月4日）
- 刑務所から釈放されたクラウゼンとアンナがソ連大使館を突然訪れた。（45年10月24日）